

埼玉

東日本大震災の発生から丸3年となった11日、県内でも各地で地震発生の後2時46分に合わせ黙禱がささげられた。多くの福島県双葉町民が一時身を寄せた加須市の旧騎西高校や、上尾市の団地でも。多くの東北地方出身者が故郷の方向に向かって静かに目を閉じた。

東日本大震災3年

被災地と埼玉と

旧騎西高校には約1000人が集まった。一時は1400人が生活した同校だが、昨年未だに全員が引っ越し、今月末で閉鎖される。「こんにちは」「お変わりないですか」。退所後、連絡が取れなくなっていた多くの双葉町民らが再会し、献花台の前で手を合わせた。

「双葉町埼玉自治会」の藤田博司会長(74)は「自分の代では帰れそうにないが、次の代や孫の代にでも帰れるようになれば」。こう話し、故郷の方向をじっと見つめた。

桶川市から両親を訪れた大石真子さん(18)は高校1年の夏、旧騎西高校に身を寄せた。今春、北本高校を卒業し、戸田市内の看護専

「記憶の風化と戦い乗り越える」

門学校に進学する。「自分にはかない経験が、患者のつらさを理解する助けになるかもしれない。いつか看護師になって福島で働きたい」。大石さんはこう話した。

上尾市上のシラコバト団地で行われた追悼式では、同団地に移住した被災者らで構成される「被災者の会ひまわり」のメンバーら約90人が、東北東に向かって黙禱した。

同会はこの日、「被災者」から脱し、自立するよう願いを込めて「東日本大震災に咲く会ひまわり」に改名した。

宮城県石巻市から単身で同団地に避難してきた高橋美江さん(69)は昨年、伊奈町に家を購入。「3年がたった今、やっとゆつくり故郷を振り返ることができると涙を拭いた。

福島県南相馬市から家族4人で上尾市に移り住んだ吉田健一さん(58)は「いつまでも甘えていられない。記憶の風化と戦いながら乗り越えていきたい」と表情を引き締めた。

福島県双葉町の方角に向かって黙禱をささげる同町から避難してきた住民。11日午後2時46分、加須市騎西の旧騎西高校

さいたま総局
〒330-0063
さいたま市浦和区
高砂1-2-1
☎048-829-2311(代)
FAX 048-830-1091
saitama@sankei.co.jp
広告 048-834-1211
購読申し込み
0120-81-2950
配達・集金
0120-34-4646
紙面・記事
03-3275-8864
Web
http://sankei.jp.msn.com/region/region.htm

あすのこよみ

(13日)
旧2月13日
〈友引〉



月齢	11.8
日出	5:57
日入	17:48
日出	14:44
日入	3:36
満潮	3:56
	15:21
干潮	9:33
	21:40
中潮	(東京)



個人の自分史が集まれば、それはきっとその町を表す貴重な財産になる。

こんな思いから、東日本大震災の被災者の「自分史作り」に取り組んでいる団体がある。宮城県石巻市を拠点にボランティア活動をしている吉沢武彦さん(35)が立ち上げた「3月10日」制作室。埼玉県では、秩父市に住む同団体メンバーの清野和彦さん(30)らが中心となつて、加須市の旧騎西高校で避難生活を経験した福島県双葉町民らの自分史を制作している。

活動のきっかけは、阪神淡路大震災の支援経験者からの助言だったという。昨年10月から旧騎西高校に足を運び、問い続けた。「3月10日は何をしていますか」

「震災前日」を聞くことから始まり、避難者の人生を丁寧にたどった。月3回ほどの取材を重ね、「行ったこともない双葉

自分史に残す被災前の故郷

「3・10は平和の象徴、元気取り戻して」

町が少しずつ見えてきた。(清野さん)という。

5時間以上に及ぶ取材テープは、文字に起こした後で文章構成を練り、自分史の主人公とともに校正を加えていく。業者に頼めば数十万円はかかる一連の



仮設住宅を訪れ、男性から話を聞く「3月10日制作室」のメンバー(右)
—福島県南相馬市

作業を、全てボランティアでまかっている。現在は7人の自分史を制作中という。

旧騎西高校で約1年10カ月を過ごした双葉町の女性(82)は加須市へは、自分の体験を思い出すために依頼した。「戦後を生きて、老後は大丈夫と思っていた矢先の3月11日。いろいろあったけど、自分が自分を生き抜いてきたことに気がついた」と、自分史の完成を前に声を弾ませていた。

吉沢さんは「3月10日は平和で幸せだった象徴の日。自分史を読む間だけでも、震災前の日常を思い出し、元気を取り戻してもらいたい」と力を込めた。

ボランティア活動、自分史制作の依頼などは、「3月10日」制作室 ☎0225・922・7820。